

ニホンアブラギリはトウダイグサ科の落葉高木であり、種子から「桐油」と呼ばれる油を採取して塗料などに用いられていた。若狭地方では「コロビ」と呼び、江戸時代から盛んに栽培され、全国一の生産量を誇っていた。昭和半ば頃の“燃料革命”を機に国内の桐油産業は衰退。繁殖・成長力が高く野生化が進み、現代では生態の単一植生化などの環境問題的様相が見られる。若狭地方一帯にこの状況が広がっていることから、この厄介モノとなっているアブラギリを有効活用し、桐油の製品化を通じて地域資源として地域の課題解決に貢献する協働取組を推進している。

